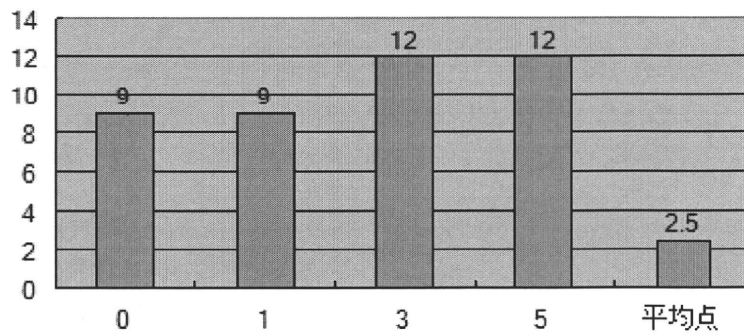
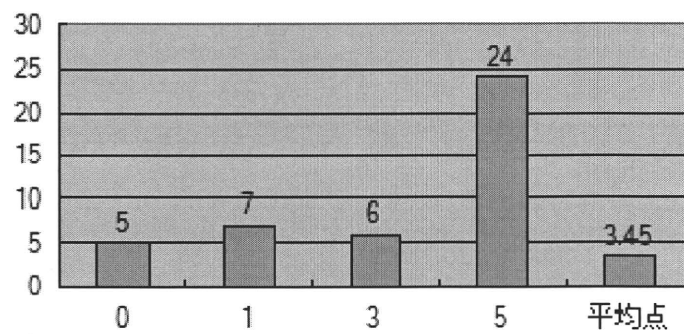


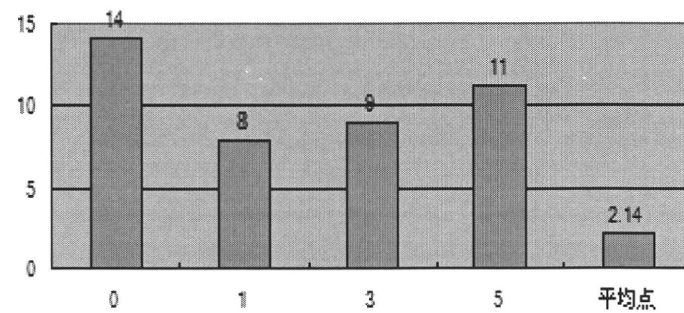
ひどく吼いたり蹴ったりする等(N=42)

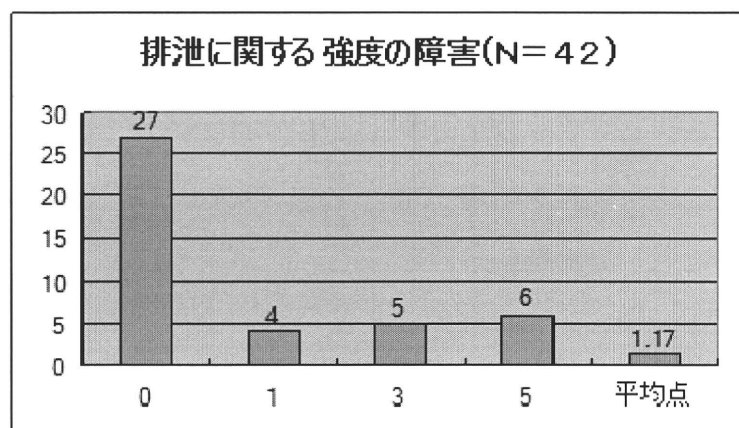
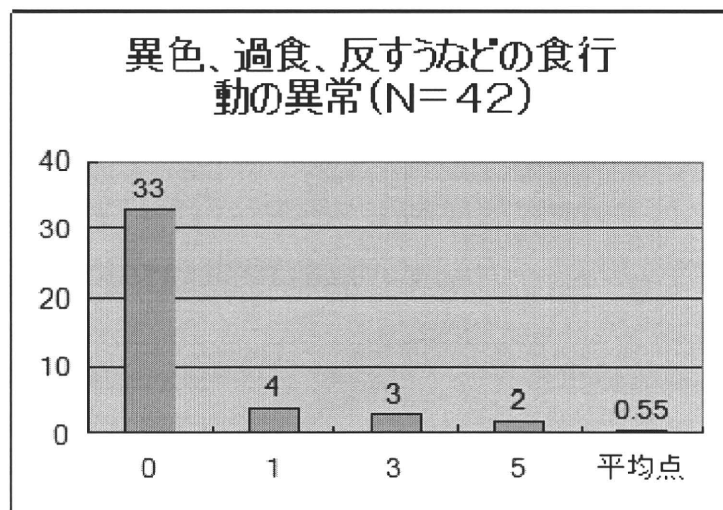
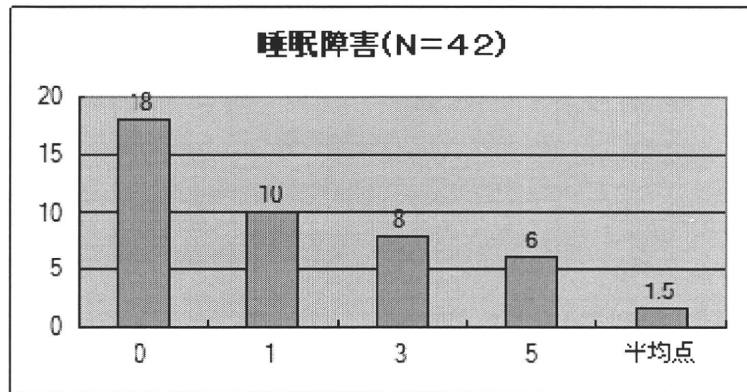


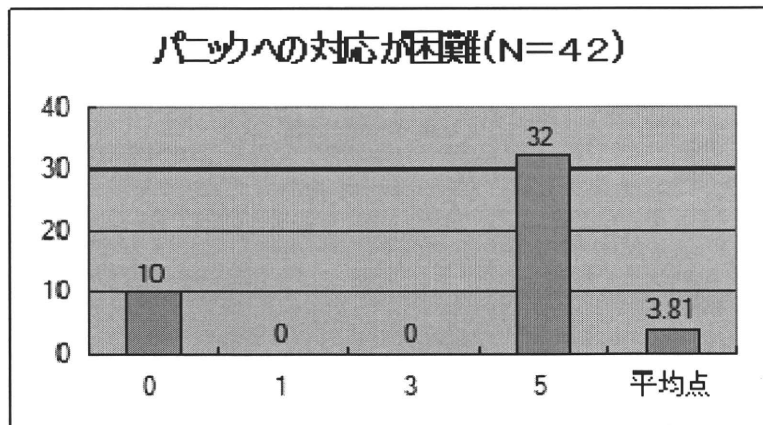
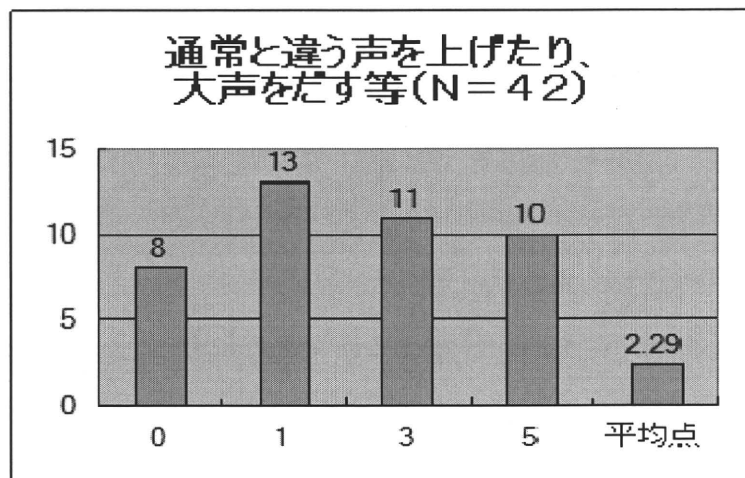
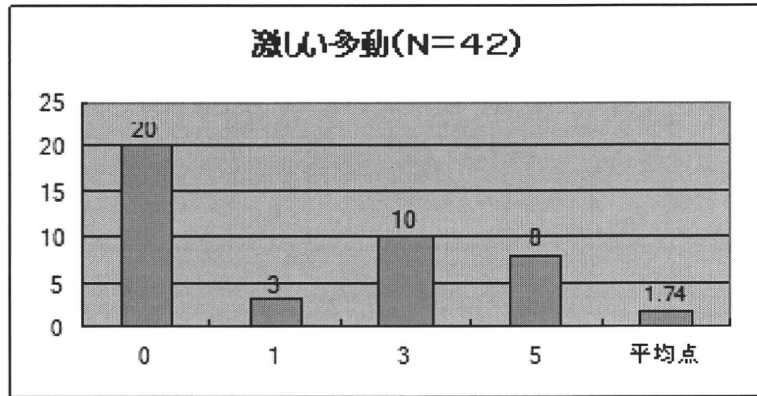
激しいこだわり(N=42)

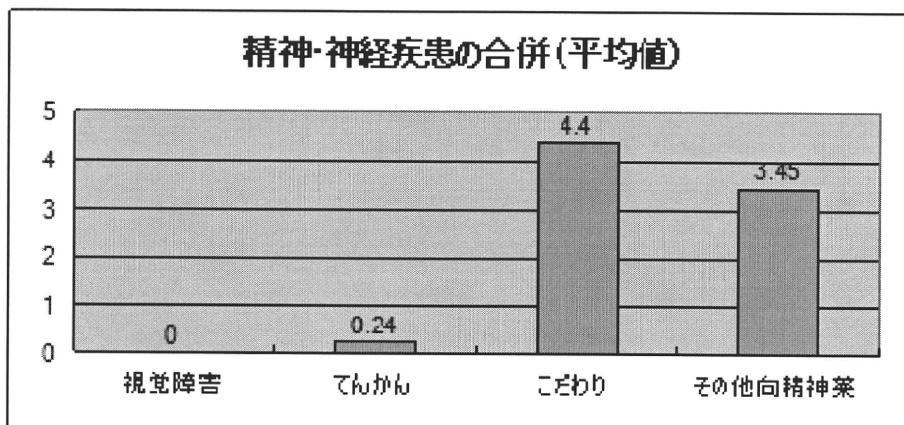
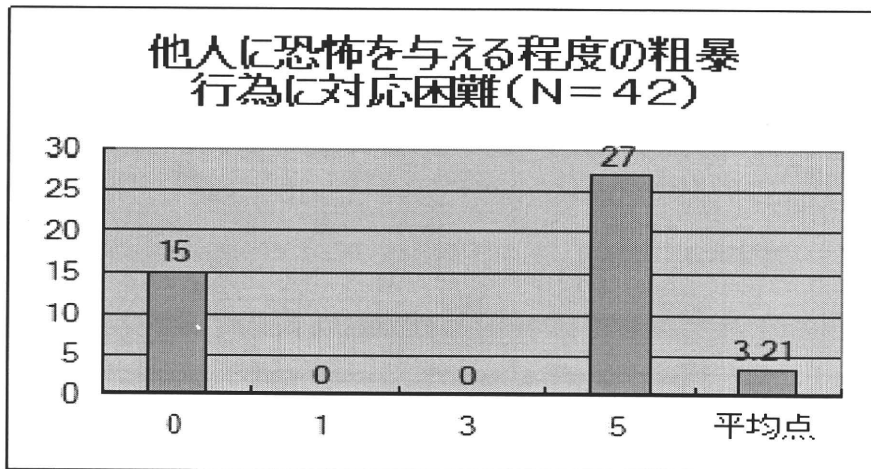
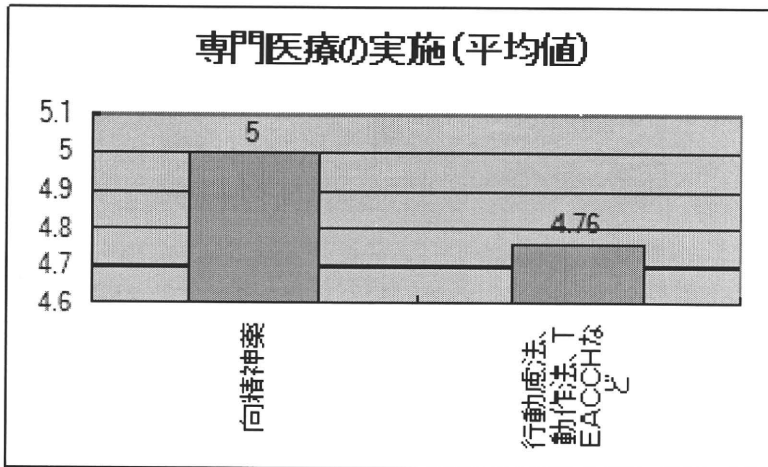


激しい器物損壊(N=42)

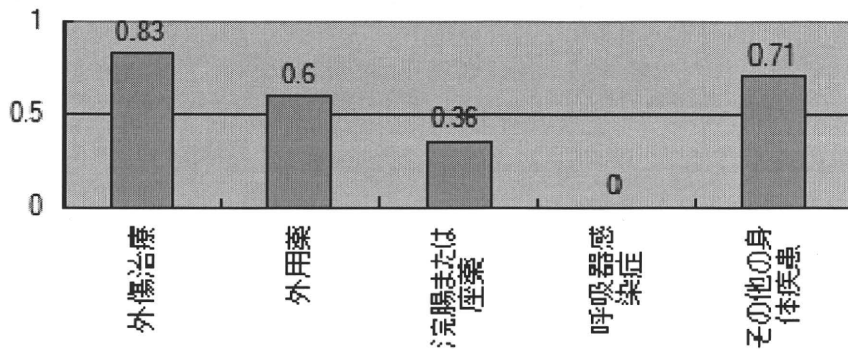




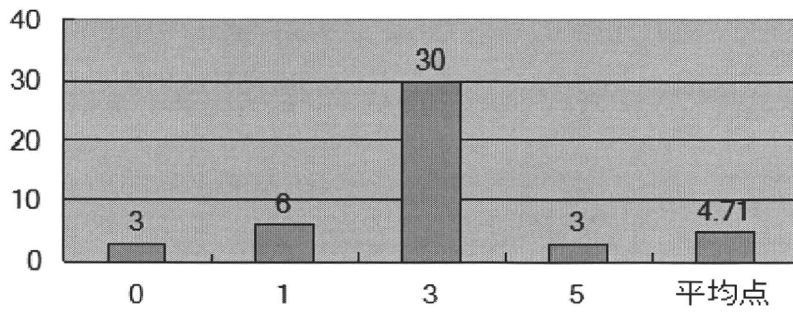




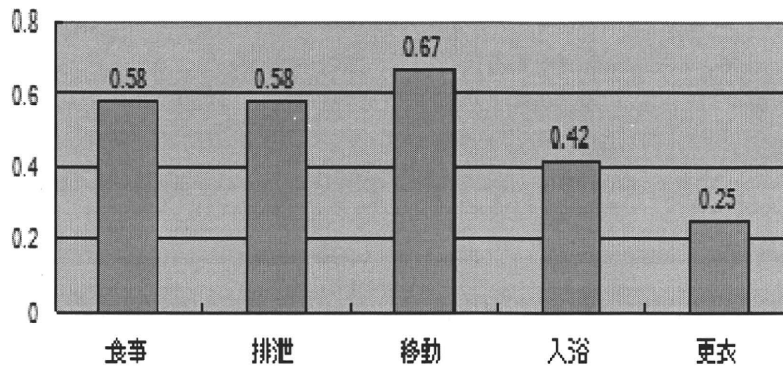
身体疾患の合併 (平均値)



自傷他害事故による外傷などの
リスクを有する行動障害への対
応 (N=42)



患者自身の死亡につながるリスク (平均値)



厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)

(主任研究者 井上雅彦)

分担研究報告書

強度行動障害を呈する成人の自閉症者への経過

分担研究者 本田 央 (社会福祉法人筑紫会)

野口幸弘 (西南学院大学)

研究要旨

本研究においては知的障害者通所施設に通所する強度行動障害を呈する知的をともなう自閉症者に対する約4年間の支援を行った。

対象者は幼少期より発達に遅れがあることとして特別支援教育の枠組みで教育されていたが、中学生になるころからつよい問題行動を繰り返すようになった。自閉症としての診断は中学卒業後の入院時になされていることから、障害特性に応じた支援は十分に受けてこなかった可能性が示唆される事例である。ケアホームをベースにした薬物治療を含め行動改善のために支援を開始した。職員との関係作り、適切な行動(作業)に強化(報酬)をそえるという段階を経て、段階的にこだわりへの対応や余暇の拡大を行った。

4年間の取り組みのうちに支援開始前は強度行動障害の判定値は36点であったが、最終的に4点まで改善を示した。

A. 研究目的

現在の日本において通所施設は地域で暮らす知的障害者にとって日中の多くを過ごす支援の場であり、地域生活を支えるうえで非常に大きな役割を果たしているといえる。

しかし通所施設においても、通所者の行動問題は非常に大きな課題であり、中には対応が非常に困難な行動障害をともなう利用者も少なからず存在する。

通所施設は入所施設に比較して、設備や人員において行動障害に対応する環境整

備が難しいといえる。しかし多くの知的障害入所施設においては定員数の問題が存在し、脱施設の流れがあることから、通所施設は強度行動障害のある障害者においても地域で生活するうえで非常に重要な資源であるといえる。

本研究においては、ケアホームで生活し生活介護を通所施設で受けている成人の自閉症の男性の支援経過を通じて、通所施設という枠組みでの支援について検討を行う。

B. 研究方法

事例について

福岡県の障害福祉サービス事業所、ケアホームに通所する男性。援助開始時 25 歳 9 ヶ月であった。

1) 診断：知的障害(中等度)、自閉症

2) 療育手帳、知能テスト等の情報：療育手帳は A2 判定(平成 18 年)で、S-M 社会生活能力検査は SQ：68(SA：8-10)であった。

ITPA は全検査 PLA：5-10 であった。

3) 行動障害に関する点数：居宅系福祉サービス類型「行動援護」の判定基準による結果は 20 点満点で 6 点であった(判定：施設職員)。

4) 生育歴

幼児期は言葉の遅れがあり、受容的で手のかからない子どもであった。小中学校は特殊学級に在籍しており、一人で電車通学していた。中学生になって行動上の問題(線路に飛び降り物を拾い上げる、電車で遠くまで行ってしまふ、教師の指示に従わずに攻撃行動をする)が出現してきた。中学卒業後は自宅で過ごしていたが、物を棒で壊れるまで叩き続けたり、固執しているもの(金物)を際限なく収集する行動が見られた。他人の家に入り込み包丁を持ち出そうとする行動に至り、警察に通報され保護され、入院することとなり、その際に「自閉症」と診断された。退院後は父親が作業所とグループホームを作り、他の利用者と一緒に生活していた。この頃にも問題行動(小さな子どもを後ろから羽交い絞めにする、大声をあげる等)は頻出しており、地域住民からの苦情が絶えなかった。そこで薬物コントロールを目的に任意入院し、2 ヶ月後退院した。退院 2 年後から支援開始となった。

5) 支援時期の問題行動

①苦痛を訴え、道路や店舗等の場所を問わずに寝転ぶ

②逃走

③殴る、蹴る、首しめ等の攻撃行動

④威嚇行為(唾はき、投石、椅子等をふり回す)

⑤大声(罵声、汚言、暴言)

これらの問題行動は生起する背景として人刺激に弱く自立的な活動が形成されていないことが挙げられた。また、表出言語は豊富なため一見すると言葉でのコミュニケーションが成立し意思疎通が可能のように何えるものの、多くの場合会話は一方通行であった。つまり理解力や認知面との不均衡が影響し、通常の方法では社会的ルールやマナーを習得することが困難であることが予測された。また行動の主な機能として、注意喚起や(自己防衛的な要素を含む)要求の代替行動として定着していた。

6) 支援目標：①コミュニケーション支援、②自己統制力の形成、③粗暴の減少の 3 点をターゲットとして支援した。

C. 結果(支援の経緯)

表 1 に個別支援計画の支援目標一覧、表 2 に強度行動障害判定基準による行動障害の変化、表 3 においては行動の様子の変化を示す。第 1 期：対応職員との関係作り

施設開設準備室の職員(第一分担研究者を含め 2 名)を中心に 24 時間の援助体制の取り組みを始めた。当初、父親の職場内で父親と共に生活していたが、社員等からの苦情が相次ぎ自宅や旅館で父親と生活をしていた。しかし見通しをもてない不安感や、急な環境変化への不満な状況で、自傷や粗暴行為が増加した。固定した生活の場所や、日中の活動場所の必要性が出てきたため、

支援者たちを中心にマンションで生活を始めた。後日家族との話し合いで、当面家族以外の方が中心で対応することが決まり、新規にケアホームを設立しマンションから引越しをした。ケアホームでは自分の居場所も確定したようで、落ち着きを見せた。

その後日中活動をする施設(現在、「障がい福祉サービス事業所」第一分担研究者勤務)が開所し、ホームの新しい通所者も加わり、それに伴い援助職員も増員された。24時間 365 日の援助体制を確立させたが、対応職員が増えたことで一貫した対応の徹底ができなくなり、問題行動が頻出した。そのため、対応職員を再度固定した結果、問題行動もいくらか安定した。週末の余暇支援として、山登り、電車等の公共交通機関の利用など楽しみとなる活動の提供を実施した。

日中活動は施設において作業活動を中心に実施し、公園や登山等の屋外活動も取り入れ、スケジュールに沿って活動の流れを見通し、生活リズムを整えることを中心に取り組み始めた。

施設開所前後の時期は、大きな環境の変化から問題行動が頻出したが、生活の見通しや支援の一貫性が保持される中で、問題行動は減少した。施設以外での活動レポーターが増加することで生活の質は向上した。

第 2 期：作業と報酬の関連性の理解

まず、①作業と報酬との関連性を伝えるため、トークンエコノミー法を導入した。報酬として、理髪店や外食へ行く等の地域社会生活への移行を想定した活動を多く取り入れた。この頃には関わる職員の対応に一貫性が保たれた。次に、適切な行動と不

適切な行動を自己確認することでセルフマネジメント力の形成を目的に②健康管理表に記入するという取り組みを行った。しかし、問題行動に関する記述を拒否する等の態度が見られ、自分の行為が適切かどうかの区別は理解しているものの、「他の利用者が先にしてきたのだから自分は悪くない」といった自分に都合の良い理由付けをすることで責任回避をしようとした。攻撃行動は減少したが、体の不調を訴える注意喚起は継続して見られた。

また、正午近くになっていた起床時間は午前 7 時頃に定着し、他のグループホーム利用者と行動を共にできるようになり、公共交通機関の利用や歯科受診を行っていくことで、生活リズムも整った。

第 3 期：家庭から自立した生活に向けて

電話での大声や攻撃行動、施設やホームからの逃走行為が頻繁に生起し、落ち着いた状態を維持することは困難を極めた。そ大きなきっかけの 1 つである携帯電話に対する脅迫的なこだわりをなくすため、これまで使用していた本人用の携帯電話が使えなくなったことを伝え、ホームに定置電話を設置した。定置電話は作業量に応じて 10 円硬貨が支払われ、それを使用することでのみ電話の使用は可能であった。設置数日後で、脅迫的に電話をかける行動は減少した。支援者間で対応が統一できていても、電話による外部からの刺激によって行動が左右されていたことが示された。加えて、「床屋や外食へ行くためのお金を貯めたい」と言って貯めることが多く、目的を持って仕事をする姿勢が見えてきた。

社会性の面では、誰にでも唐突に「守ってあげましょうか」と尋ねるため、周囲を

困惑させてしまうことがあった。支援者間では「強いから大丈夫です」というように、一貫して断るようにした。女性に対して甘えたいという思いから「そばにいてください」という発言が毎日続く時期があったが、「大人は甘えないです」という言葉かけを行うことで次第に減少したが、人に対しての関心も減少した。この時期服用し始めた薬による影響からか、食事・仕事でも独り言の時間が多くなり、叫び声や怒鳴り声をあげることが多くなった。今やるべき行動を意識してもらうため、仕事を促したり、独り言で言っている不適切な内容とは別の話をするなどの声かけを試みたが効果はなく、すぐに独り言を言い出し独自の空想にふけってしまう状態であった。

第4期：余暇活動のレポーターを広げる

服薬に対する拒否的言動はこれまでもあったが、この時期から頑なな拒否が見られ始めた。そこで施設に来所してから服薬するようにしたが、その結果通所に対しても拒否するようになった。そこで、楽しい活動を設定するように支援計画を立案した。服薬について通所時に一切話題にしないようにしてからは、特に通所に対する拒否はなくなり、次第に来所ができるようになった。また、第3期の後半より、人に対して関心が希薄になっている状態が続き、独り言が多くお茶等の限られた要求時以外で自ら人に話しかけることが少なくなった。職員からの話しかけに対しても、「はい」と返事はするが、話かけの内容について意識して答えることが少なかった。時折叫びや怒鳴り声をあげることがあるが、以前のような対人的なものではなく、独り言の延長の自己完結型であった。

作業報酬の達成期間は1週間単位で実施し、規定量の評価を全て獲得したら週末の余暇活動に参加するというものを実施した。報酬として設定する活動については、1週間のはじめに本人が決めるようにした。その活動の選択時は、写真を意識して見比べ、自分がしたい活動を選んでいく様子が見えた。作業は日によって進むペースや作業意識が違い、職員が促しても1度も行わない日もあれば、自分から「作業します」と要求する日もあった。今後は、未体験の活動も提案し、余暇レポーターを増やしていくことになる。

D. 考察

早期から発達の遅れに気づきがあり、特別支援教育の枠組みで教育がなされていたが、自閉症の診断は行動障害が強くなって強制入院時になされたという事例であった。周囲が障害特性への理解が不十分なまま、不適切な行動が修正されることなく、増悪していったと考えられる。

支援開始時には、本人にとって刺激が多く不適応行動を引き出しやすい住環境から構造化された環境に移し、これまでの悪循環を一度絶つために家族との接触を控えるという環境整備を行った。この環境整備により問題行動は減少し、職員との関係作りや適応行動の指導に発展させることが可能となった。本人特性に応じて、刺激を調整し、適応行動を段階的に獲得できるよう支援体制を組んだことが行動改善に有効であったと考えられる。

行動障害は落ち着きをみせていったが、服薬の調整等で状態の変動は少なくなく、非社会的な反応もみられた。本人の様子の変化にあわせて、自分で作業量を調整する

方法を教えたり、余暇活動の充実など継続的な支援は必要であると考えられる。

E. 文献

平成 18 年日本福祉心理学会：年次研究大会
自主シンポジウム「自閉性障害の青年が呈
する行動障害の軽減と改善」に加筆修正

小林重雄監修・野口幸弘 2002 福祉臨床
心理学第 4 章 7 強度行動障害を示す人へ
の援助の実際 コレール社

加藤進編集者 2005 行動援護ガイドブッ
ク 日本知的障害者福祉協会

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

特になし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

特になし

2. 実用新案登録

特になし

3. その他

特になし

表1 個別支援計画の支援目標一覧

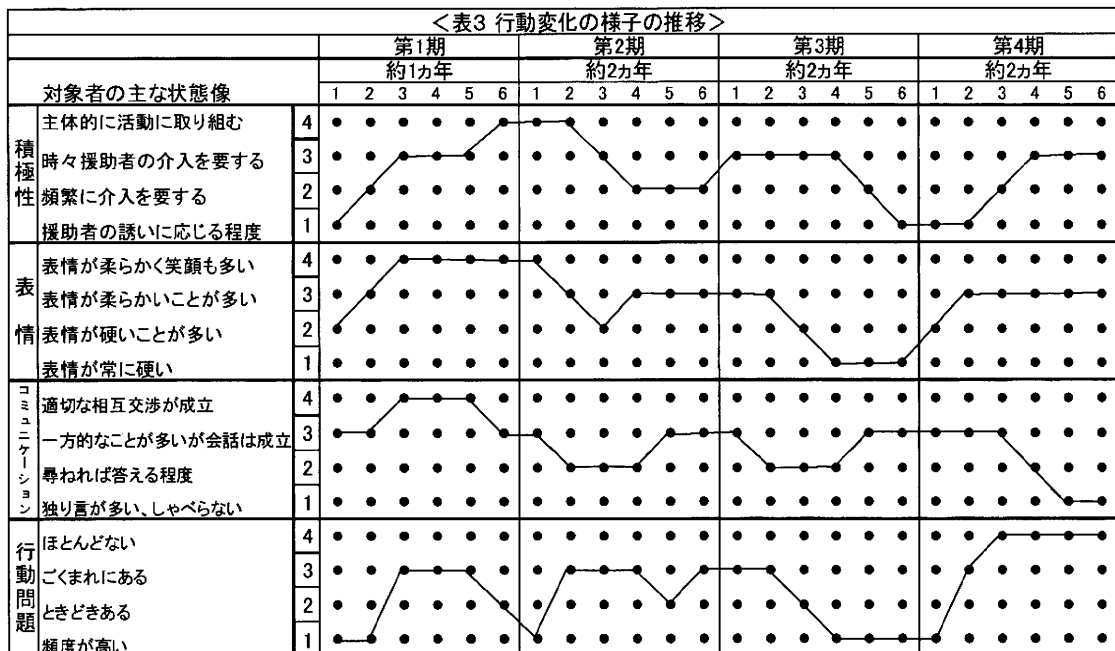
年齢	目標	領域要素	評価
26歳	長期1 作業と報酬の関連性の理解 短期① 報酬(給料)を貯めることで外食を楽しむことへのつながりを理解する	職業行動 社会性強	3
	長期2 適切な買い物の仕方を獲得する 短期① 職場近くのコンビニで、昼食を自分の財布から購入することが出来る	地域生活 社会性コ	3
27歳	長期1 自己の行動管理が出来る 短期① 健康表の記入が出来る	行動管理 技術	2
	長期2 仕事と報酬の関連性の理解 短期① 給料を貯めることで楽しみへつながることを理解する 短期② トークンシステム理解の獲得	職業行動	3
28歳	長期1 仕事と報酬の関連性の理解 短期① 給料を貯めることで楽しみへつながることを理解する 短期② トークンシステムの獲得	職業行動 社会性	3
29歳	長期1 仕事と報酬の関連性の理解 短期① 作業回数によって週末の昼食代が変動することを理解する	職業行動 社会性	3
30歳	長期1 作業量で昼食代が変動する事を理解する 短期① ビス入れが1かご終わると10円もらえることを理解する	職業行動 知識	1
	長期2 ホームの電話機で電話をかける事ができる 短期① 携帯電話が使えないことを理解する ② お給料で定置電話を使うことができる ③ 仕事で電話代を貯めることができる。	行動管理 知識 知識 社会性コ	5
30歳	長期1 体重を68kg未満に維持する 短期① 毎日健康台帳をつけることができる 短期② 日中活動で5000歩以上歩くことができる 短期③ 天気のいい日に散歩等の運動ができる	健康管理 社会性コ 社強 社強	5
	長期目標1 毎日通所することができる 短期目標① 通所してシールをもらう事ができる	行動管理 社会性コ	1
31歳	長期目標1 仕事を行い週末の余暇活動に参加することができる 短期目標① 余暇活動を選択する事ができる	レジャー 社会性コ	5

※ 評価：目標行動達成の度合い（1～5の5段階で、4以上を達成と評価する）

表2 強度行動障害判定基準による行動障害の変化

行動障害の内容	開始	1期	2期	3期	4期
ひどい自傷	0	0	0	0	0
強い他傷	5	3	3	5	1
激しいこだわり	5	5	3	1	0
激しいもの壊し	5	5	3	3	0
睡眠の乱れ	3	1	1	1	3
食事に関する障害	0	0	0	0	0
排泄に関する障害	0	0	0	0	0
著しい多動	5	3	5	1	0
著しい騒がしさ	3	3	1	1	0
パニックのもたらす結果が大変なため処遇困難な状態	5	3	5	3	0
粗暴で相手に恐怖感を与えるため処遇困難な状態	5	5	3	5	0
合計	36	28	24	20	4

参考文献：厚生省児童家庭局通知（1993）「強度行動障害特別処遇事業の実施について」



研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
井上雅彦	広汎性発達障害に対する行動論的アプローチ		発達障害の臨床心理学	東京大学出版会	東京	2010	35-57
井上雅彦 梅永雄二	自閉症支援の共通理解のために		自閉症支援の最前線さまざまアプローチ	学習研究社	東京	2010	8-29
井上雅彦 藤坂龍司	自閉症の子どものためのABA基本プログラム〈2〉	井上雅彦	家庭で無理なく楽しくできるコミュニケーション課題30	学研	東京	2010	8-38
シャナ ニコルズ, ジーナ M モラヴチク, サマラ P テーテンバウム		稲垣 由子 辻井 正次 (監修) テラー 幸恵 (翻訳)	「自閉症スペクトラムの少女が大人になるまで」	東京書籍	東京	2010	
辻井正次 杉山登志朗 望月 葉子	「アスペルガー症候群 大人の生活完全ガイド」			保健同人社	東京	2010	
明翫光宜 辻井正次	思春期・成人期のアスペルガー症候群・高機能広汎性発達障害Ⅱ部アスペルガー症候群	山崎晃資	「自閉症スペクトラムと特別支援教育」	金剛出版	東京	2010	173-182
辻井正次 望月直人	1章3節 発達障害と不登校	田島誠一	「不登校ーネットワークを生かした多面的援助の実際」	金剛出版	東京	2010	73-78
辻井正次 川上ちひろ	発達障害児者の家族支援ニーズの実態と課題	市川 宏 伸 (監修) 内山登紀夫 田中康雄 辻井正次 (編)	『発達障害者支援の現状と未来図 早期発見・早期療育から就労・地域生活支援まで』	中央法規		2010	220-238

川上ちひろ 辻井正次	学校における「性と関係性の教育」—発達障害のある子どもたちとの取り組みから始まった“関係性”を教える性教育—		『健康教室』増刊号(第61巻第13号)	性教育実践アイデアノート		2010	10
安達潤	ソーシャルストーリーによる自閉症スペクトラム支援	東條ほか	「発達障害の臨床心理学」	東京大学出版会		2010	58~66
安達潤	後期中等教育における発達障害の子どもたちへの特別支援教育の課題—北海道の高等養護学校実態調査から考える—	監修 市川宏伸、 編集 内山登喜夫 田中康雄 辻井正次	「発達障害支援に現状と未来図」	注方法規出版		2010	59-79

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
井上雅彦 井上菜穂	発達障害児の不登校および行動問題の再発を予防・改善するための条件	臨床心理学	10(1)	33-37	2010
井上雅彦	教師のための発達障害の基本的知識	子どもの心と学校臨床	N02	21-29	2010
野村和代 鈴木将文 井上雅彦 杉山登志朗	強度行動障害の再検討1 強度行動障害特別処遇事業における対象事例の支援・経過についての分析	小児の精神と神経	50(3)	291-296	2010
式部陽子 橋本美恵 井上雅彦	保健士を中心とした発達に気になる子どものペアレント・トレーニングの試み	小児の精神と神経	50(1)	83-92	2010
原口英之 井上雅彦	発達障害児の問題行動のアセスメントに関する面接者トレーニングの効果	行動療法学研究	36(2)	131-145	2010
廣瀬央恵 岡村寿代 井上雅彦	幼児における自己感情と他者感情の理解—性差および年齢差についての検討	発達心理臨床研究	16	71-80	2010

井上雅彦	ADHDにおける行動療法	精神科治療学	25(7)	919-924	2010
井上雅彦	学齢期から始める就労のための自己コントロールとコミュニケーション(3)	自閉症教育の実践研究	N019	64-65	2010
井上雅彦	学齢期から始める就労のための自己コントロールとコミュニケーション(2)	自閉症教育の実践研究	N018	64-65	2010
井上雅彦	学齢期から始める就労のための自己コントロールとコミュニケーション(1)	自閉症教育の実践研究	N017	64-65	2010
岡村章司 井上雅彦 高階美和	自傷行動を示す知的障害児に対する家族支援 月1回の母親へのコンサルテーションを通して	特殊教育学研究	47(5)	307-315	2010
井上雅彦	二次障害を有する自閉症スペクトラム児に対する支援システム	脳と発達	42(3)	209-212	2010
橋本俊顕 井上雅彦	自閉症スペクトラムへの対応一児の将来を念頭に	脳と発達	42(3)	191-192	2010
井上雅彦	発達障害者支援における生活スキルの支援	心理臨床の広場	3(1)	26-27	2010
伊藤大幸 神谷美里 吉橋由香 宮地泰士 野村香代 谷伊織 辻井正次	小中学生の攻撃性一特性不安および抑うつとの関連からの検討	精神医学	52(5)	489-497	2010
田ノ岡志保 辻井正次	子どもたちの「できること」を伸ばす一発達障害のある子どものスキル・トレーニング実践(6)双方向コミュニケーションを学ぶ	こころの科学	(151)	128-134	2010
辻井正次	発達障害のある子どもたちの家庭と学校(3)問題行動がなくてもたいへんなことがあること	子どもの心と学校臨床	(3)	99-109	2010

辻井 正次 中島 俊思	発達障害児者支援に向けた効果的な乳幼児健診のあり方 (特集 発達障害者支援の新しい流れ)	月刊地域保健	41(9)	32-39	2010
細溝さやか 辻井正次	子どもたちの「できること」を伸ばす—発達障害のある子どものスキル・トレーニング実践(8)こだわりの調整の仕方を知る—視点移すスキル	こころの科学	(153)	108-113	2010
瀬瀬えみ 辻井正次	子どもたちの「できること」を伸ばす—発達障害のある子どものスキル・トレーニング実践(7)こだわりの調整の仕方を知る—視点移すスキル	こころの科学	(152)	107-112	2010
野呂健二 金子一史 本城秀次 吉川徹 石川美都里 松岡弥玲 辻井正次	高機能広汎性発達障害児の母親の抑うつについて	小児の精神と神経	50(3)	259-267	2010
岡田涼 谷伊織 大西将史 中島俊思 宮地泰士 藤田知加子 望月直人 大西彩子 松岡弥玲 辻井正次	中学生における自傷行為の経験率— 単一市内における全数調査から	精神医学	52(12)	1209-1212	2010
林 陽子 吉橋由香 田倉さやか 辻井正次	高機能広汎性発達障害児を対象とした完全主義対応プログラム作成の試み	小児の精神と神経	50(4)	407-417	2010

中島俊思 岡弥玲 谷伊織 大西将史 永田雅子 野村香代 吉橋由香 神谷美里 辻井正次	保育記録による発達尺度の作成とその項目分析および信頼性の検討	小児の精神と神経	50(4)	385-398	2010
中島俊思 辻井正次	低出生体重児の気質的特性に関する研究--ICQの保護者評定と課題場面の第三者評定による比較検証	中京大学現代社会学部紀要	4(1)	209-221	2010
鈴木勝昭 中村和彦 尾内康臣 辻井正次 森則夫	多分野連携と子どものこころの解明への試み：自閉症の脳画像研究について	脳21	13(2)	151-154	2010
藤田知加子 辻井正次	多分野連携と子どものこころの解明への試み：読み書き困難を示す児童の現状とその支援	脳21	13(2)	161-165	2010
Ohnishi M Okada R Tani I Nakajima S Tsuji M	Japanese version of school form of the ADHD-RS: an evaluation of its reliability and validity.	Res Dev Disabil	Dec;31(6)	1305-12.	2010

<p>Thanseem I Nakamura K Miyachi T Toyota T Yamada S Tsuji M Tsuchiya KJ Anitha A Iwayama Y Yamada K Hattori E Matsuzaki H Matsumoto K Iwata Y Suzuki K Suda S Kawai M Sugihara GI Takebayashi K Takei N Ichikawa H Sugiyama T Yoshikawa T Mori N</p>	<p>Further evidence for the role of MET in autism susceptibility.</p>	<p>Neurosci Res</p>	<p>Oct;68(2)</p>	<p>137-41.</p>	<p>2010</p>
<p>Miyahara, M Ruffman, T Fujita, C Tsuji, M</p>	<p>How Well Can Young People with Asperger's Disorder Recognize Threat and Learn about Affect in Faces?: A Pilot Study</p>	<p>Research in Autism Spectrum Disorders</p>	<p>v4 n2</p>	<p>242-248</p>	<p>2010</p>
<p>Tani I Okada R Ohnishi M Nakajima S Tsuji M</p>	<p>Japanese version of home form of the ADHD-RS: an evaluation of its reliability and validity.</p>	<p>Res Dev Disabi </p>	<p>Dec;31(6)</p>	<p>1426-33.</p>	<p>2010</p>

<p>Munesue T, Yokoyama S, Nakamura K, Anitha A, Yamada K, Hayashi K Asaka T, Liu HX, Jin D, Koizumi K, Islam MS, Huang JJ, Ma WJ, Kim UH, Kim SJ, Park K, Kim D, Kikuchi M, Ono Y, Nakatani H, Suda S, Miyachi T, Hirai H, Salmina A, Pichugina YA, Soumarokov AA, Takei N, Mori N, Tsuji M, Sugiyama T, Yagi K, Yamagishi M, Sasaki T, Yamasue H, Kato N, Hashimoto R, Taniike M, Hayashi Y, Hamada J, Suzuki S, Ooi A, Noda M, Kamiyama Y, Kido MA, Lopatina O, Hashii M, Amina S, Malavasi F, Huang EJ, Zhang J, Shimizu N, Yoshikawa T, Matsushima A, Minabe Y, Higashida H.</p>	<p>Two genetic variants of CD38 in subjects with autism spectrum disorder and controls.</p>	<p>Neurosci Res</p>	<p>Jun;67(2):</p>	<p>181-91.</p>	<p>2010</p>
<p>安達潤</p>	<p>自分らしい「幸せのかたち」 が見える自立に向けて特別 支援教育がすべきこと</p>	<p>実践障害児教 育</p>	<p>444</p>	<p>.16-19</p>	<p>2010</p>